

歴代の町内先輩農家の中で、東北・北海道ブロック出場まで進んだのは過去2人だけとか。初の全国出場。壮行激励会で練習成果を披露し、持ち時間10分間という制限時間に対して、9分58秒とジャストタイムで発表してみせ、みんなの期待が膨らみました。



農協ホールで開いた激励会(2月7日、東川町農協大ホール)

が日中不在だったため、じいちゃん子として育ったそうです。5年前、祖父、定一さん(昨年11月、85歳で逝去)から経営移譲を受けた耕作面積は3㌔。町内水稻農家の平均耕作面積13㌔と比べてかなり少ないスタートでした。その直後、定一さんが負傷して



町長に結果報告(2月21日、役場応接室)

しかし、臨んだ大舞台では「少しゆっくりと話したら、38秒オーバーしてしまつて…」と苦しい。

◇ 共働きの両親

4代目の後継者として就農して5年目。今では約18ヘクタールを経営する中核農家になってきました。かつて、プロスノーボーダーとして活躍する日を夢見ていたそうです。『今では趣味の一つとなった』と壇上で発表したスノーボード。

手術。長い入院生活と高齢が重なって、仕事することが出来なくなつてしまいました。「農繁期の手伝い程度しかやったことがなく、ハウスの管理の仕方、苗の水やり、温度管理を口頭で教えてもらつた。けれどもまくいかなかつた」そうです。じいちゃんのけがで真剣に農業の厳しさと向き合うことに。青年部の仲間とも情報交換をするようになり、青年の主張への出場を勧められて臨んだ大会。祖父の背中から学んだ農家の心、農業への取り組みに目覚めた思いを込めたスピーチでした。



JA全国青年大会で発表した会場(全国6ブロックを勝ち抜いた各地代表の応援団で臨席) (2月12日、東京日比谷公会堂(東川町農協から提供))



農閑期のスキー場アルバイトはこととして3シーズン目になりました(旭川市台場のサンタプレゼントパークで)

そのメインゲレンデはカムイスキーリンクス(旭川市神居古潭)。「行き帰りの途中にあるから好都合」とサンタプレゼントパーク(同市台場)で始めたスキー場アルバイトは3シーズン目を迎え、

今では練習に欠かせないゲレンデの一つにもなりました。キャンモアスキー学校長を務める父、正さん(55)から習って覚えたグレンドテクニク。次は2人の息子へと受け継がれそうです。



(東川町農協から提供)

今、生き生きと 農業 古高 良記さん

チャンスをつかんで出場した「JA青年の主張」全国大会で、農業への熱い思いを披露しました。仲間の期待を背に受け初めて立つた大舞台。狙った最優秀賞は逃したものの「人前に立つとか発表は苦手だったけれど、ちよつと自信ついたかもしれない」。発表を終えてそう話す姿は、少し背が伸びて肩幅が増したようです。「水稻20ヘクタールはほしい」とこれからの経営に欲がはじめてきました。